



松岡祥男（まつおか つねお）

一九五一年一月二三日高知県生まれ。七人兄弟の末っ子／高知県立追手前高校校定時制中退／印刷会社勤務

現住所 〒七八〇 高知市井口町四五

著書 詩集『ある手記』（同行衆叢書）一九八二年一月／『意識としてのアジア』（深夜叢書社）一九八五年一月／『アジアの終焉―吉本隆明と吉本ばななのあいだ―』（大和書房）一九九〇年一月／『論註日記―（世界史）と日常のはざまから―』（學芸書林）一九九三年一〇月／『文学という泉（仮題）』（ミッドナイト・プレス）近刊予定

吉本さんと初めてお会いしたのは一九八〇年八月である。吉本さんが高知市の夏季大学の講師として来高された時だ。講演は「文学の原型について」で、『心的現象論』の「了解論」の「了解の諸相」を基調に、屈指の論考のひとつである「触れられた死」につながる話をされた。わたしたちはこの機会にぜひとも、吉本さんのお話を伺いたいとおもい、その旨を申し入れて、快諾を得ていた。講演の翌日、『同行衆』のメンバーを中心に三十数名で、「吉本さんを囲む会」をもった。吉本さんは、わたしたちの拙い質問にも懇切に、そして包括的に答えてくださった。その時の印象は、わたしにとって不朽のものだ。その模様は『思想の基準をめぐって』（深夜叢書社）に収録されているので、読んでいただければわかるとおもう。

吉本さんの書かれるものは、必ず現実的な問題意識に貫かれている。だからリアルタイムで読むのがいちばんだ。しかも、普遍的な本質を射程にいられているので、けっして褪せることはない。吉本隆明の思想というとき、そこに吉本さんという人がいるのだ。